

私事で恐縮ですが、母が亡くなった3年半前を契機に、それまでは年に1~2度帰省するほかは、本人としてはあまり気に留めていなかった故郷の縁者や事象への思いが、知らず知らずに心を占めていることが多くなったように思われます。

これには、その3年半前にNHKで放送されていて珍しく熱中した朝の連続テレビ小説・ちりとてちんで、五木ひろしの歌う『ふるさと』が、和久井映見演じる主人公の母の心の歌として何度も流されていたことや、毎回のように映し出される若狭・小浜の風景からの連想も関わりがあるようです。

さて、今回の発見は言葉です。廃県置藩。去る6月2日、朝日ニュースター・ニュースの深層（キャスター・萱野稔人氏：今年2月12日の本稿(4)で《発見》した集英社新書『超マクロ展望・世界経済の真実』の共著者ということで、この番組を視るようになりまし）にゲストで登場された東大特任准教授・神里達博氏が、震災後の列島社会の在り方を示す一種のキーワードとして発された言葉です。

当然これは、140余年前明治新政府が実施した「廃藩置県」を意識してのものです。神里氏の専門である科学論やリスク学の見地から、大地震など天変地異の活動期に入っているのかもしれない、「どんなことでも起こりうる非常時」に在ることを大前提として、これを何とか凌ぐための方策の一つとして出てきました。

氏曰く、権力集中・経済成長至上主義など近代から昭和にかけての《集中と統合》の遺制から脱却する必要があり、首都機能の分散は当然として地方行政などの単位も見直したい。現在の都道府県単位というのは中途半端であるような気がする。ついては、必ずしも忠実に合わせるということではないが、江戸期の藩の規模、人口数十万人ぐらいで、個

## 野田眞のこんなの発見(6)

### 《廃県置藩》という言葉

人の生活圏としてある程度自分のこととして考えることができ、相互に親しみやすく付き合いやすい範囲ぐらゐが適切なのではないだろうか。この《藩》をベースに道州制が乗り、そして国家があるという形。避けられなくなった放射性廃棄物の管理というようなことは国家の仕事というふうな、それぞれの単位の果たすべき役割を劃然と区切る……。

この話を聞いていて、深いところでの治まりやすさ、馴染みやすさということを想いました。筆者の故郷は鳥取県ですが、生まれたところは藩で言えば因幡。同じ鳥取県でも西側は伯耆の国で別の藩です。親和性ということで改めて考えてみると、伯耆で思い当たるのは、全国的にも有名と思われる大山と境港の水木しげるロードぐらい。北は日本海。南側の岡山県の美作地方とは、千数百級級の中国山地が巖然とブロックしています。筆者は、その伯耆や美作よりも東の但馬のほうに親和性を感じています。それは、小学4年か5年の夏、山陰線・福知山線を辿って初めて独りで大阪に行った時からのものです。

一般にはおそらく空路利用が当たり前のことになった今でも、筆者は時々鉄道を利用して帰省しますが、山陰線で城崎を過ぎると、あるいは岡山・兵庫側の峠を越えると、「帰ってきた」と感じ、今回のテーマには無縁のある理由から、一種の自制的な身構えを取ります。やや大げさに言えばそれは、故郷を捨てて生活の根拠を異国に置くようになった半端な人間としての身構えです。ごく自然な反応として、自分がそのようになってしまふところに、故郷・因幡という存在の、自分にとっての特

野田 眞(生活経済ジャーナリスト)

私たちの「生活経済の将来」という観点から対象・テーマを選び、実際の見聞・体験を通じて知り得た・学んだ・考えさせられたことを、できるだけ鮮明にお伝えしたいと思います。

異性・大切さを思います。

もう一つ、思い出したことがあります。以前、本レポートで、クルーメンバーの内藤眞弓さんが山形県・庄内医療生協の活動に関するレポートをしておられました。その中に、医療生協の活動範囲の適正規模として確か人口10万人程度とあったような……。いずれにしてもその規模単位は、鶴岡を拠点とする旧庄内藩・酒井氏の版図とかなりの程度重なるのではないのでしょうか。

同じ山形県でも朝日連峰や月山の重厚な山塊で隔てられた新庄・村山・米沢地方は決して入って来ないように思います。ちなみに、鶴岡(旧東田川郡・黄金村)出身の故藤沢周平氏は、故郷のことを殊更多く書く作家として有名でしたが、その多くは庄内・鶴岡のものでした。

08年12月20日付け朝日新聞に、フリーライター・速水健朗という人の『若者の地元志向／消えた東京へのあこがれ』という比較的大きなコラムが載りました。これには、06~07年当時の都道府県間の人口移動が大きく減っていること、東京まで電車で1時間程度の首都圏に住む若者たちがほとんど東京に行こうとしない傾向があること、この頃から流行り始めたケータイ小説ベストセラーの登場人物に東京への憧れがなく、就職・進学で上京しようとせず、メール等を通じて親密な地元圏を作り上げていること……などが指摘され、新しい共同体の芽生えの可能性を示唆しています。

こういう動きと震災後の列島社会の在り方の検討とが幸福な形で繋がることができれば、《廃県置藩》の構想も夢ではないかもしれません。